Ⅲ　短期入院患者の退院後の学校の受け入れ状況、家族自身の変化についての意見。

1.　学校設備が徐々に改善されつつある。

2.　学校の教師が協力的になってきた。

3.　公共施設や道路等の整備に関心をもつようになった。

4.　風邪の恐しさを知った。

5.　重症化した患者を見て不安を感じる。

6.　訓練方法や何をすべきか少し理解できた。

7.　どこへもこぼせなかった愚痴を病棟看護婦に言えるようになり、気持が軽く張りが出てきた。

以上いろいろの立場からの意見を調査して要約したが、方法としては、面接法をとった。これら出された意見を総合してみると、共通の問題が表出したと考えられる。

1.　学校の受け入れ体制に関すること。

2.　患者の重症化、急変に関すること。

3.　介助に関すること。

4.　卒業後の職業選択、就業問題など。

臨床看護は、これら地域の問題にどう関りあっていくのか、何ができるか考察した。

1.　家庭でみられる間は、家族と専門病院、地域医療機関及び学校関係と密接な連絡をとりながら一般社会で生活させる。そのために、家族に看護方針や介助法等の具体的な指導をする。

2.　学校の休暇等を利用して、ディケアー、または短期間入院などで具体的医療を受けさせ、その間患者と介助者に日常生活動作や、活動について指導助言を行なう。

3.　合併症を併発したり、治療の必要が生じたときは、直ちに入院させられるよう患者も周囲も体制を整えておく。特に臨床側では、そのための緊急ベッド、看護要員を確保しておく。

4.　家族の都合による臨時入院の体制を導入する。大阪府の場合、重心や肢体不自由の施設では一時入院が受け入れられるようになった現在、筋ジスは大変な面が多くあると思うが、努力の必要があると思う。

筋ジス専門病棟の看護に従事するナース自身試行錯誤の連続ではあるが、臨床で得た知識を１人でも多くの患者に還元したいと考えている。

31) 短期入院の受け入れについて

国立療養所刀根山病院
大久保　一　枝　　笹　田　み　や
岡　田　史　子　　押　方　真　理

＜はじめに＞

当院では開設以来、長期入院の形態をとってきたが、昭和50年９月から新しい試みとして短期入

院の受け入れを始め、約1年が経過したので、受け入れの状況及び推移について報告する。

＜目　　的＞

1. 具体的な医療の実施。
2. 日常生活の動作内容その他の観察及び指導。
3. 患児、家族、普通学校に対する啓蒙。
4. 長期療養となる前の親、患児の心がまえなど。

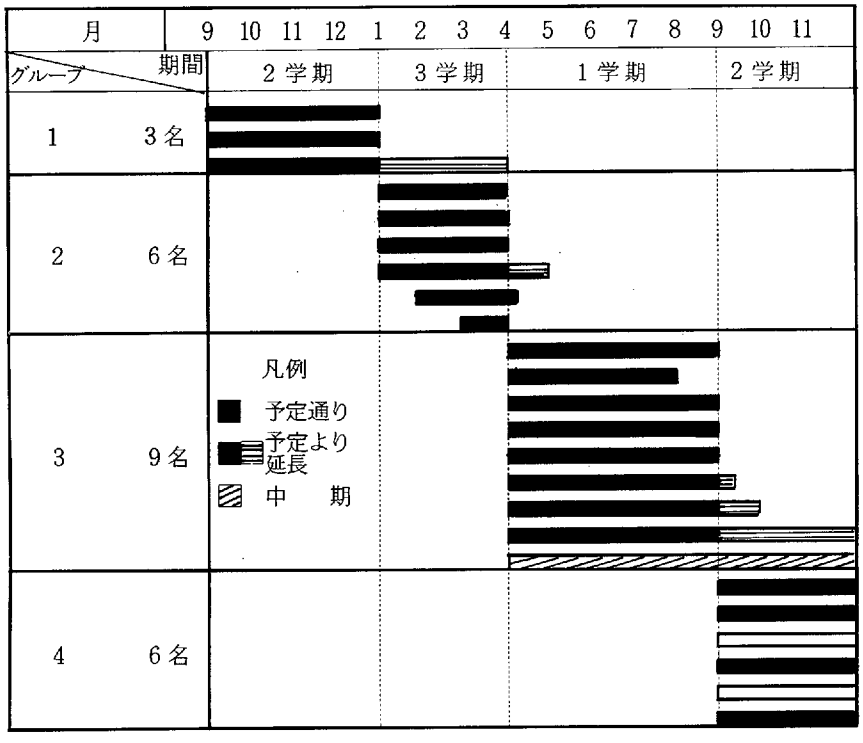
＜扱いについて＞

1. 費用は長期と同じく、児童相談所を通じて措置入院。
2. 学校関係は、転校の形式をとらず普通学校及び養護学校からの委託児童扱い。
   その関係で最低期間を1学期間とした。

＜入院期間及び状況＞

総数24名の入院を受け入れたが、その状況は次表のようになる。

短期入院期間一覧表



予定通り退院できたのは14名であり、医療上の理由で入院期間が延長したのは3名で他は、家庭の理由で延びている。

＜ADLの変化について＞

入院後は可能な限り独自で行わせることを原則として指導しているが、入院時にできないことがかなり独自でできるようになる。特に排泄、食事、衣服の着脱、洗面、はみがき等、躾そのものに

問題があるように思われ、患児の指導とともに親への指導の必要性が感じられる。

＜看護側からみた患者集団の変化について＞

50年９月１グループの場合、長期入院の患者から、よそ者であるかのような特別視の傾向があった。ひとりの新入院患者を車椅子で取り囲み、威圧感を加えるなどしておびえさせるようなことがしばしばうかがわれた。職員は、長期入院患者に、仲間意識をもって受け入れができるような働きかけや配慮もしてきたが、何回かの経験と、スポーツやクラブ活動を通して相互の接触が深まり、４グループ目の現在、殆んど特別視はみられない。かえって小さい子を見守っているような態度に変ってきている。１年かかって、相互関係がやっとうまくゆき始めた感じである。

＜今後の課題として＞

入院を患者にとって最も必要から適切な時期に行ない、こういった試みをきっかけに医療機関を有効に多くの人が利用できるようにしてゆきたい。また退院後の継続看護が大切と思う。その他最大の課題は、症状が進行して入院が必要になったときの受け入れ体制を確立することにあると思う。

32) 自　助　具　の　工　夫

国立療養所刀根山病院
玉置公子　中村三枝子
谷　昭子　栗林真理子
大久保一枝　兼子文代

＜はじめに＞

筋ジス患者にとって自助具の持つ意義は、ＡＤＬの拡大だけでなく、患者の自立心を助長し、また精神的満足を与えるという面でも重要なものである。

そこで今回は、①車椅子上での坐位保持のためのサイド枕、②尿器の改善、③ラジオ体操作棒の考案について、具体的に工夫したので報告する。

＜サイド枕について＞

サイド枕として考案したものは３種類あり、

① 布貼で中に雑誌を入れたもの。

② レザー貼りでスポンジを入れたもの。

③ レザー貼りでフェルトを入れたものである。

試作品①は、車椅子上での坐位を安定させるため、患者と車椅子の隙間をなくすようなものとして考案したもので、高さはアームレストまでとした。しかしこれは、腰部は固定されても、股関節部から大腿部の動きが窮屈で、また布の汚染が目立つなどの欠点があった。

試作品②は、患者に当たる側はスポンジ、車椅子サイドに当たる側はベニヤ板を入れてまわりを

検索用テキスト　OCR（光学的文字認識）ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

<はじめに>

当院では開設以来、長期入院の形態をとってきたが、昭和 50 年 9 月から新しい試みとして短期入
院の受け入れを始め、約 1 年が経過したので、受け入れの状況及び推移について報告する。